

日蓮大聖人御書全集

かんぎようはちまんしょう

諫曉八幡抄

新版
730
ゝ
747

かんぎようはちまんしよう

諫曉八幡抄

こうあん ねん がつ さい

弘安 3 年 ('80) 12 月 59 歳

そ うま いっさいにさい とき 番 伸 円 脛

夫れ、馬は、一歳二歳の時は、たといつがいのび、まろすね

脛 細 腕 伸 そうら やまい み

にすねほそく、うでのびて候えども、病あるべしとも見え

しち はっさい み 肥 ち 太

ず。しかれども、七・八歳なんどになりて、身もこえ、血ふと

かみ勝 しも 遅 そうら しょうせん たいせき 積

く、上かち下おくれ候えば、小船に大石をつめるがごと

ちい き おお このみ 生 おお

く、小さき木に大いなる菓のなれるがごとく、多くの

病 しゅつたい ひと ゆう 合 ちから 弱 じゅ

やまい出来して、人の用にもあわず、力もよわく、寿も

短 てんじんとう はじ

みじかし。天神等も、またかくのごとし。成劫の始めには、

せんじよう かほう しゅじようう きた うえ ひと あく そうら

先生の果報いみじき衆生生まれ来る上、人の悪も候わね

み ひかり 鮮 こころ 潔 にちがつ

ば、身の光もあざやかに、心もいさぎよく、日月のごと

鮮 しし ぞう 勇 そうら

くあざやかに、師子・象のいさみをなして候いしほどに、

じようこう 漸 過 じゅうこう さき てんじんとう とし

成劫ようやくすぎて住劫になるままに、前の天神等は年

重 げじゆん つき いまう きた てんじん かほう

かさなりて下旬の月のごとし。今生まれ来れる天神は果報

すいげん げれつ しゅじようたぶん しゅつたい いってん

衰減し、下劣の衆生多分は出来す。しかるあいだ、一天に

さんさい 起 しかい しちなん しゅつげん いっさい

三災ようやくおこり、四海に七難ほぼ出現せしかば、一切

しゅじようはじ く らく 思 し

衆生始めて苦と楽とおもい知る。

とき ほとけしゅつげん たま ぶつきよう もう くすり てん にん かみ

この時、仏出現し給いて、仏教と申す薬を天と人と神

与

たま

ともしび

あぶら

添

ろうじん

つえ

与

とにあたえ給いしかば、灯に油をそえ、老人に杖をあ

てんじんとうかえ

いこう

増

せいりよく

ぞうちよう

えたるがごとく、天神等還つて威光をまし、勢力を増長せ

じようこう

しこと成劫のごとし。

ぶつきよう

ごみ

味

わ

ざいせ

しゅじよう

仏教にまた五味のあじわい分かれたり。在世の衆生は、

じようこう

かほう

甚

衰

成劫ほどこそなかりしかども、果報いとうおとろえぬ

しゅじよう

ごみ

なか

あじ

嘗

いこうせいりよく

衆生なれば、五味の中にいずれの味をもなめて威光勢力

増

そうら

ほとけめつど

のち

しょうぞうにせんねんす

まつぼう

をもまし候いき。仏滅度して後、正像二千年過ぎて末法

もと

てん

かみ

あしゅら

だいいりゅうとう

とし

重

になりぬれば、本の天も神も阿修羅・大竜等も年もかさな

み

疲

こころ

弱

いまう

きた

てん

りて、身もつかれ、心もよわくなり、また今生まれ来る天・

にん しゅらとう

しょうかほう

あくてんにんとう

人・修羅等は、あるいは小果報、あるいは悪天人等なり。

しょうじょう ぐんだいじょうとう にゆう らく しょうそ じゆくそみ ふく

小乗・権大乘等の乳・酪・生蘇・熟蘇味を服すれども、

ろうじん そじき 与 こうにん ばくはんとう たてまつ

老人に麤食をあたえ、高人に麦飯等を奉るがごとし。し

とうせい わきま がくにんとう いにしえ 習

かるを、当世これを弁えざる学人等、古にならいて、日本

こく いっさい しょうじんとう おんまえ あごんきよう ほうどう はんにや けごん

国の一切の諸神等の御前にして、阿含経・方等・般若・華嚴・

だいにちきようとう ほうらく くしゃ じようじつ りつ ほつそう さんろん けごん

大日経等を法樂し、俱舎・成実・律・法相・三論・華嚴・

じようど ぜんとう そう ごじ そう たま ろうじん そじき あた

浄土・禅等の僧を護持の僧とし給える、ただ老人に麤食を与

しょうに こわい 含

え小児に強飯をくくめるがごとし。

いま しょうじようきよう しょうじようしゆう だいじようきよう

いかにいわんや、今の小乗経と小乗宗と大乘経

だいじようしゅう

いにしえ

しようだいじよう

きよう

しゅう

と大乘宗とは、古の小大乘の経・宗にはあらず。

てんじく

ぶつぼうかんど

渡

とき

しようだい

きようぎよう

きんげん

し

天竺より仏法漢土へわたりし時、小大の経々は金言に私

げん 雑

しゅうじゅう

てんじく

かんど

ろんじ

にんし

言まじわれり。宗々は、また、天竺・漢土の論師・人師、

しよう

だい

争

だい

しよう

あるいは小を大とあらそい、あるいは大を小という。あ

しよう

だい

書

雑

だい

しよう

い

るいは小に大をかきまじえ、あるいは大に小を入れ、あ

さき

きよう

のち

争

のち

さき

るいは先の経を後とあらそい、あるいは後を先とし、ある

さき

のち

けんきよう

みつきよう

みつきよう

いは先を後につけ、あるいは顕経を密経といい、密経を

けんきよう

たと

にゆう

みず

い

くすり

どく

くわ

顕経という。譬えば、乳に水を入れ、薬に毒を加うるが

ごとし。

ねはんぎよう

ほとけみらい

しる

のたま

とき

もろもろ

ぞく

涅槃経に仏未来を記して云わく「その時、諸の賊、

だいご

ゆえ

くわ

みず

みずおお

醍醐をもつての故に、これに加うるに水をもつてす。水多き

ゆえ

にゆう

らく

だいご

いつさい

う

とううんぬん

をもつての故に、乳・酪・醍醐、一切ともに失す」等云々。

あごん

しようじようきよう

にゆうみ

ほうどう

だいじつきよう

阿含の小乗経は乳味のごとし。方等の大集経・

あみだきよう

じんみつきよう

りようがきよう

だいにちきようとう

らくみ

阿弥陀経・深密経・楞伽経・大日経等は酪味のごとし。

はんによきようとう

しようそみ

けごんきようとう

じゆくそみ

般若経等は生蘇味のごとく、華嚴経等は熟蘇味のごとく、

ほつけ

ねはんぎようとう

だいごみ

しようじようきよう

にゆうみ

法華・涅槃経等は醍醐味のごとし。たとい小乗経の乳味

ぶつせつ

いちぶん

くすり

なりとも、仏説のごとくならば、いかでか一分の薬となら

ざるべき。いわんや諸の大乗経をや。いかにいわんや

もろもろ

だいじようきよう

ほけきよう

法華経をや。

しかるに、がっし 月氏より漢土に経を渡せるかんど きよう わた 訳人はやくにん

いっぴやくはちじゅうしちにん

なか うちに羅什三蔵一人を除いて前後のぞ

ぜんご

一百八十七人なり。その中に羅什三蔵一人を除いて前後

いっぴやくはちじゅうろくにん

じゆんにゆう

みず

くわ

くすり

どく

い

の一百八十六人は、純乳に水を加え、薬に毒を入れた

ひとびと

り

わきま

いっさい

にんし

まつがくとう

る人々なり。この理を弁えざる一切の人師・末学等、たと

いっさいきよう

どくじゆ

じゆうにぶんきよう

むね

う

い一切経を読誦し、十二分経を胸に浮かべたるようなり

しょうじ

はな

難

いちぶん

験

とも、生死を離るることかたし。また一分のしるしあるよ

てんち

し

ほど

いの

な

まおう

うなりとも、天地の知る程の祈りとは成るべからず。魔王・

まみんとうしゆご

くわ

ほう

しるし

あ

つい

魔民等守護を加えて法に験の有るようなりとも、終にはそ

の身も檀那も安穩なるべからず。譬えば、旧医の薬に毒を

まじ 差 置 きゆうい でしとう ぬす と

雑えてさしおけるを、旧医の弟子等、あるいは盗み取り、

じねん と ひと やまい じ

あるいは自然に取って人の病を治せんがごとし。いかでか

あんのん

安穩なるべき。

とうせいにほんこく しんごんとう しちしゅう じょうど ぜんしゅうとう

当世日本国の真言等の七宗ならびに浄土・禅宗等の

しよがくしやとう こうぼう じかく ちしやうとう ほけきやうさいだいいち だいご ほつけ

諸学者等、弘法・慈覚・智証等の法華経最第一の醍醐に法華

だいに だいさんとう わたくし みず い し ぶっせつ

第二・第三等の私の水を入れたるを知らず。仏説のごと

いつさいくしつ たいか のが だいにちきやう

くならば、いかでか一切俱失の大科を脱れん。大日経は

ほけきやう おと しちじゅう たいか のが こうぼうとう てんどう

法華経より劣ること七重なり。しかるを、弘法等、顛倒し

だいにちきようさいだいいち

さだ

にほんこく

ぐつう

ほけきよういちぶ

て大日経最第一と定めて日本国に弘通せるは、法華経一分

にゆう

だいにちきようしちぶ

みず

い

みず

の乳に大日経七分の水を入れたるなり。水にもあらず、

にゆう

だいにちきよう

ほけきよう

乳にもあらず。大日経にもあらず、法華経にもあらず。

ほけきよう

に

だいにちきよう

に

しかも法華経に似て大日経に似たり。

だいかくせそん

ねはんぎよう

しる

のたま

わ

めつご

大覚世尊、このことを涅槃経に記して云わく「我が滅後

しようほうまさ

めつじん

ほつ

とき

おお

あく

ぎよう

において○正法将に滅尽せんと欲す。その時、多く悪を行

びくあ

ないしもくごによ

にゆう

う

たり

むさぼ

ずる比丘有らん乃至牧牛女の、乳を売って多利を貪らん

ほつ

ゆえ

にぶ

みず

くわ

ないし

にゆう

と欲せんがための故に、二分の水を加うるに乃至この乳は

みずおほ

とき

きよう

えんぶだい

まさ

ひろ

水多きがごとし○その時、この経、閻浮提において当に広

るふ

とき

まさ

もろもろ

あくびくあ

きよう

く流布すべし。この時、当に諸の悪比丘有つて、この経

しようりやく

わ

たぶん

な

よ

しようほう

しきこうみみ

を抄略し、分かちて多分と作し、能く正法の色香美味を

めつ

もろもろ

あくにん

きようてん

どくじゆ

滅すべし。この諸の悪人、またかくのごとき經典を讀誦

によらい

じんみつ

ようぎ

めつじよ

ないしさき

と

すといえども、如来の深密の要義を滅除して乃至前を抄つ

のち

つ

のち

と

さき

つ

ぜんご

なか

つ

なか

て後に著け、後を抄つて前に著け、前後を中に著け、中を

ぜんご

つ

まさ

し

もろもろ

あくびく

前後に著けん。当に知るべし、かくのごとき諸の悪比丘は、

ま

はんりよ

とううんぬん

これ魔の伴侶なり」等云々。

いま

にほんこく

あん

よはじ

ひさ

な

今、日本国を案ずるに、代始まつてすでに久しく成りぬ。

ふる

しゆご

ぜんじん

さだ

ふく

つ

じゆ

げん

いこうせいりよく

旧き守護の善神は、定めて福も尽き、寿も減じ、威光勢力も

おとろ ぶつぼう あじ 嘗 いこうせいりよく ぞうちよう

衰えぬらん。 仏法の味をなめてこそ威光勢力も増長すべ

ぶつぼう あじ みな 違 よわい 長 くに

きに、 仏法の味は皆たがいぬ。 齢はたけぬ。 いかでか、 国の

わざわ はら うじこ しゅご うえほうぼう くに そうろう

災いを払い、 氏子をも守護すべき。 その上謗法の国にて 候

うじがみ たいか 戒 しゅご そうら

を、 氏神なればとて大科をいましめずして守護し候えば、

ぶつぜん きしよう やぶ かみ うじこ あいし とが

仏前の起請を毀る神なり。 しかれども、 氏子なれば愛子の失

捨 しゅご たま ほけきよう ぎようじや

のようすてずして守護し給いぬるほどに、 法華經の行者

怨 こくしゅ こくじんとう たいじ くわ しゅご とが

をあだむ国主・国人等を対治を加えずして守護する失によ

ぼんしやくとう はちまんとう ぼつ たま

つて、 梵釈等のためには八幡等は罰せられ給いぬるか。 こ

いちだいい ひ

のことは一大事なり。 秘すべし、 秘すべし。

ひ

ある経の中に、きょう なか ほとけ 仏せかい たほう この世界と他方の世界との梵釈せかい ぼんしやく・

日月・四天・竜神等を集めて、にちがつ してん りゆうじんとう あつ 我が正像末の持戒・破戒・

無戒等の弟子等を第六天の魔王・悪鬼神等が人王・人民等の

身に入み いって悩乱のうらんせんを、見みながら聞ききながら治罰じばつせずして

須臾しゆゆ 過もかならすごすならば、必ず梵釈等の使いをして四天王に仰

せつけて治罰を加うべし。じばつ くわ もし氏神治罰を加えずば、梵釈・

四天等してんとう しゆごしんも守護神に治罰を加うべし。くわ ぼんしやく 梵釈またかくのごとし。

梵釈等は必ずこの世界の梵釈・日月・四天等を治罰すべ

し。ぼんしやくとう かなら もししからずんば、三世の諸仏さんぜ しよぶつ しゆつせの出世に漏れ、永く梵釈なが ぼんしやく

とう　　くらい　　うしな　　むけんだいじよう　　しず　　しやか　　たほう　　じつぼう

等の位を失つて無間大城に沈むべしと、釈迦・多宝・十方

しよぶつ　　みまえ　　きしよう　　か　　お

の諸仏の御前にして起請を書き置かれたり。

いま　　あん　　にほんしやうこく　　おう　　かみ　　たも

今、これを案ずるに、日本小国の王となり神となり給う

しやうじよう　　さんげん　　ぼさつ　　だいじよう　　じっしん　　ほつけ　　みやうじ

は、小乗には三賢の菩薩、大乘には十信、法華には名字・

ごほん　　ぼさつ　　うじがみあ　　むじん　　くどく　　しゆ

五品の菩薩なり。いかなる氏神有つて無尽の功德を修すと

ほけきよう　　みやうじ　　き　　いちねんさんぜん　　かんぼう　　しゆご

も、法華經の名字を聞かず一念三千の觀法を守護せずんば、

たいい　　ぼさつ　　な　　なが　　むけんだいじよう　　しず　　そうろう

退位の菩薩と成つて永く無間大城に沈み候べし。

ゆえ　　ふそうき　　い　　でんぎやうだいし　　はちまんだいぼさつ　　おん

故に、扶桑記に云わく「また伝教大師、八幡大菩薩の奉

ため　　じんぐうじ　　みずか　　ほけきよう　　こう　　すなわ　　き　　お

為に神宮寺において自ら法華經を講ず。乃ち聞き竟わつ

て、大神、託宣だいにん たくせんすらく『我われは、法音ほうおんを聞きかずして久ひさしく歳年さいねん

を歴へたり。幸さいわいに和尚かしように値遇ちぐうして正教しやうぎやうを聞きくことを得えた

り。兼かねて我わがために種々しゆじゆの功德くどくを修しゆす。至誠しせいに随喜ずいきする

も、何ぞ徳を謝なん とく しやするに足らん。兼かねて我わが持たもつところの法衣ほうえ

有あり』。即すなわち託宣たくせんの主しゆ、自みずから宝殿ほうでんを開ひらいて、手てずから紫むらさき

の袈裟けさひと一むらさきつ、紫ころもひとの衣ささ一かしようつを捧ぶじようげ、和尚だいひりきに奉ささ上かしようす。『大悲力だいひりき

の故ゆえに、幸さいわいに納受のうじゆを垂たれたまえ』。この時ときに、禰宜ねぎ・祝はふり

等とう、各おのおの歎異おのたにいして云いわく『元来がんらいかくのごときことを見みず聞きか

ず。奇事きじなるかな』。この大神だいにんの施ほどこしたもうところの法衣ほうえは、

いま さんのういん あ
今、山王院に在るなり」云々。 うんぬん

いま い はちまん にんのうだいじゅうろくだいおうじんてんのう
今、謂わく、八幡は人王第十六代応神天皇なり。その時 とき
ぶつきような けさ ころもあ

は仏経無かりしかば、ここに袈裟・衣有るべからず。人王
だいさんじゅうだいきんめいてんのう ちさんじゅうにねん かみ あらわ たま
第三十代欽明天皇の治三十二年に神と顕れ給い、それよ

このかたこうにんごねん ねぎ はふりとうしだい ほうでん しゅご

り已来弘仁五年までは禰宜・祝等次第に宝殿を守護す。い
おう とき けさ おさ ころろ 得

ずれの王の時この袈裟を納めけると意えし。しかして、
ねぎとうい がんらいみ き とううんぬん だいぼさつ

禰宜等云わく「元来見ず聞かず」等云々。この大菩薩いか
けさ ころも たも たま ふしぎ

にしてかこの袈裟・衣は持ち給いけるぞ。不思議なり、
ふしぎ

不思議なり。

きんめい

このかたこうにんごねん

いた

おう

にじゅうにだい

また欽明より已来弘仁五年に至るまでは、王は二十二代、

ぶつぼう

にひやくろくじゅうよねん

あいだ

さんろん

じょうじつ

ほつそう

仏法は二百六十余年なり。その間に、三論・成実・法相・

くしゃ

けごん

りつしゅう

ぜんしゅうとう

ろくしゅう

しちしゅう

にほんこく

わた

俱舎・華嚴・律宗・禅宗等の六宗・七宗、日本国に渡つ

はちまんだいぼさつ

おんまえ

きよう

こう

ひとびと

かず

し

て、八幡大菩薩の御前にして経を講ずる人々その数を知ら

ほけきよう

どくじゆ

ひと

な

ず。また法華経を読誦する人もいかでか無からん。また、

はちまんだいぼさつ

ごほうでん

かたわ

じんぐうじ

ごう

ほけきようとう

八幡大菩薩の御宝殿の傍らには、神宮寺と号して法華経等

いつさいきよう

こう

どう

だいし

いぜん

ときさだ

の一切経を講ずる堂、大師より已前にこれあり。その時定

ぶつぼう

ちようもん

たま

なん

いまはじ

われ

ほうおん

めて仏法を聴聞し給いぬらん。何ぞ今始めて「我は、法音

き

ひさ

ねんさい

へ

とう

たくせん

たも

を聞かずして久しく年歳を歴たり」等と託宣し給うべきや。

幾

ひとびと

ほけきよう

いつさいきよう

こう

たま

なん

いくばくの人々か法華經・一切經を講じ給いけるに、何ぞ

おんけさ

ころも

まい

たま

この御袈裟・衣をば進らせ給わざりけるやらん。

まさ

し

でんぎようだいしいぜん

ほけきよう

もんじ

よ

当に知るべし、伝教大師已前は、法華經の文字のみ読み

ぎ

あらわ

い

えんりやく

けれども、その義はいまだ顕れざりけるか。去ぬる延暦

にじゅうねんじゅういちがつ

ちゅうじゆん

ころ

でんぎようだいしい

ひえいざん

なんと

二十年十一月の中旬の比、伝教大師、比叡山にして南都

しちだいじ

ろくしゅう

せきとくじゅうよにん

ぶじよう

ほけきよう

こう

たま

七大寺の六宗の碩徳十余人を奉請して法華經を講じ給い

ひろよ

まつなとう

ににん

しんか

ほうもん

ちようもん

歎

しに、広世・真綱等の二人の臣下、この法門を聴聞してなげ

い

いちじよう

ごんたい

いた

さんたい

みけん

かな

いて云わく「一乗の権滯を慨み三諦の未顕を悲しむ」。ま

い

ちようよう

さんう

けつ

ざいは

りやつこう

た云わく「長幼は三有の結を摧破するも、なおいまだ歴劫

てつ あらた

とううんぬん

のち

えんりやくにじゅういちねんしょうがつじゅうくにち

の轍を改めず」等云々。その後、延暦二十一年正月十九日

たかおでら

しゅじょうみゆき

たま

ろくしゅう

せきとく

でんぎよう

に高雄寺に主上行幸ならせ給いて、六宗の碩徳と伝教

だいし

め あ

しゅう

しょうれつ

き

大師とを召し合わせられて宗の勝劣を聞こしめししに、

なんと

じゅうしにんみなくち

と

はな

のち

かさ

たいじよう

南都の十四人皆口を閉じて鼻のごとくす。後に重ねて怠状

さだ

じよう

い

しょうとく

ぐけ

このかた

いま

を捧げたり。その状に云わく「聖徳の弘化より以降、今に

にひやくよねん

あいだ

こう

きようろん

かずおお

ひし

り

二百余年の間、講ずるところの経論その数多し。彼此、理

あらそ

うたが

と

さいみよう

を争えども、その疑いまだ解けず。しかもこの最妙の

えんしゅう

せんよう

とううんぬん

おも

円宗なおいまだ闡揚せず」等云々。これをもつて思うに、

でんぎようだいしいぜん

ほけきよう

みこころ

あらわ

伝教大師已前には法華経の御心いまだ顕れざりけるか。

はちまんだいぼさつ

み き

ごたくせんあ

さ

八幡大菩薩の「見ず聞かず」と御託宣有りけるは、指すな

さ

あき

あき

り、指すなり。白らかなり、白らかなり。

ほけきよう

だいし

い

わがめつど

のち

よ

いちにん

法華經の第四に云わく「我滅度して後、能くひそかに一人

ほけきよう

と

まさ

し

ひと

すなわ

のためにも、法華經を説かば、当に知るべし、この人は則ち

によらい

つか

ないしによらい

すなわ

ころも

如来の使いなり乃至如来は則ちために衣をもつてこれを

おほ

とううんぬん

とうらい

みろくぶつ

ほけきよう

と

たも

覆いたもう」等云々。当来の弥勒仏は法華經を説き給うべき

しゃかぶつ

だいかしようにそんじや

おんつか

ころも

おく

たも

ゆえに、釈迦仏は大迦葉尊者を御使いとして衣を送り給う。

でんぎようだいし

ほとけ

おんつか

ほけきよう

と

たも

また伝教大師は仏の御使いとして法華經を説き給うべき

はちまんだいぼさつ

つか

ころも

おく

たも

ゆえに、八幡大菩薩を使いとして衣を送り給うか。

だいぼさつ

でんぎようだいしいぜん

かすい

ほけきよう

ふく

またこの大菩薩は、伝教大師已前には加水の法華經を服

せんじよう ぜんこん

だいおう

う

しておわしましけれども、先生の善根によつて大王と生ま

たま

ぜんこん

よけい

かみ

あらわ

くに

しゅご

たま

れ給いぬ。その善根の余慶、神と顕れてこの国を守護し給

いま

せんじよう

ふく

よけい

つ

しようほう

あじ

いけるほどに、今は先生の福の余慶も尽きぬ。正法の味も

う

ほうぼう

ものとうこくちゆう

じゅうまん

としひさ

にほん

失せぬ。謗法の者等国中に充滿して年久しけれども、日本

こく

しゅじよう

ひさ

あお

たま

馴染

たいか

国の衆生に久しく仰がれ給いてなじみをし、大科はあれど

す

思

ろうじん

ふこう

こ

す

も捨てがたくおぼしめし、老人の不孝の子を捨てざるがご

てん

責

あ

たま

とくして、天のせめに合い給いぬるか。

けさ

ほけきようさいだいいち

と

ひと

懸

また、この袈裟は法華經最第一と説かん人こそかけまい

たも

でんぎようだいし

のち

だいいち

ざす

ぎしんかしよう

らせ給うべきに、伝教大師の後は、第一の座主・義真和尚、

ほつけさいだいいち

ひと

懸

たも

いわ

法華最第一の人なれば、かけさせ給うことその謂れあり。

だいに

ざす

えんちようだいし

でんぎようだいし

みでし

第二の座主・円澄大師は、伝教大師の御弟子なれども、

こうぼうだいし

でし

ほうぼう

似

けさ

また弘法大師の弟子なり。すこし謗法にいたり。この袈裟の

ひと

懸

だいさん

ざす

えんにんじかくだいし

人にはあらず、かけがたし。第三の座主・円仁慈覚大師は、

な

でんぎようだいし

みでし

こころ

こうぼうだいし

でし

名は伝教大師の御弟子なれども、心は弘法大師の弟子、

だいにちきようだいいち

ほけきようだいし

ひと

けさ

いっこう

懸

大日経第一・法華経第二の人なり。この袈裟は一向にかけ

懸

ほけきよう

ぎようじや

がたし。たといかけたりとも、法華経の行者にはあらず。

うえ

とうせい

てんだいざす

いっこうしんこんざす

とうせい

その上また、当世の天台座主は一向真言座主なり。また当世

はちまん べつとう

おんじょうじ りょうり

とうじ

の八幡の別当は、あるいは園城寺の長吏、あるいは東寺の

まつりゆう

とお

しゃか

たほう

じつぼう

しよぶつ

末流なり。これらは、遠くは釈迦・多宝・十方の諸仏の

だいおんてき ちか

でんぎようだいし

しゅうてき

たと

だいばだった

大怨敵、近くは伝教大師の讐敵なり。譬えば、提婆達多が

だいかくせせん

おんけさ

懸

りょうし

ぶつえ

大覚世尊の御袈裟をかけたるがごとし。また獦師が仏衣を

き しし

皮

剥

とうせい

えいざん

ざす

被て師子のかわをはぎしがごとし。当世の叡山の座主は、

でんぎようだいし

はちまんだいぼさつ

たま

そうら

おんけさ

懸

伝教大師の八幡大菩薩より給わつて候いし御袈裟をかけ

ほけきよう

しりよう

うば

と

しんごん

りよう

たと

て、法華経の所領を奪い取つて真言の領となせり。譬え

あじやせおう

だいばだった

し

ば、阿闍世王の提婆達多を師とせしがごとし。しかるを、

だいぼさつ

けさ

剥

返

たま

いち

たいか

大菩薩のこの袈裟をはぎかえし給わざる、一の大科なり。

だいぼさつ

ほけきよう

みぎ

ぎようじや

しゅご

よし

この大菩薩は、法華經の御座にして行者を守護すべき由

きしよう 書

すうねん

あいだほけきよう

だいおんてき

じばつ

の起請をかきながら、数年が間法華經の大怨敵を治罰せざ

ふしぎ

うえ

ほけきよう

ぎようじや

しゅつげん

ること不思議なる上、たまたま法華經の行者の出現せる

きた

しゅご

わ

まえ

こくしゅとう

あだ

を、来つて守護こそなさざらめ、我が前にして国主等の怨す

いぬ

さる

噛

へび

かえる

呑

たか

きじ

ししおう

ること、犬の猿をかみ、蛇の蝦をのみ、鷹の雉を、師子王

うさぎ

ころ

いちど

戒

の兎を殺すがごとくするを、一度もいましめず。たとい

戒

偽

愚

いましむるようなれども、いつわりおろかなるゆえに、

ぼんしやく

にちがつ

してんとう

責

はちまんだいぼさつ

被

たま

梵釈・日月・四天等のせめを、八幡大菩薩かぼり給いぬる

れい

きんめいてんのう

びだつてんのう

ようめいてんのう

いじようさんだい

にや。例せば、欽明天皇・敏達天皇・用明天皇、已上三代の

だいおう もののべのおおむらじもりやとう

勸

せんじ くだ

大王、物部大連守屋等がすすめによつて、宣旨を下して

こんどう しやくそん

や たてまつ

どう

ひ はな

そうに 責

金銅の釈尊を焼き奉り、堂に火を放ち、僧尼をせめしか

てん

ひ下

だいら 焼

うえ にほんこく

ばんみん 失

ば、天より火ふりて内裏をやく。その上、日本国の万民、とが

あくそう

病 し

たいはん す

けつく さんだい

なくして悪瘡をやみ死ぬること大半に過ぎぬ。結句、三代の

だいおう

ににん だいじん

ほかおお

おうじ

くぎようとう

あく

大王、二人の大臣、その外多くの王子・公卿等、あるいは悪

そう

かつせん

滅

たま

とき

にほんこく

瘡、あるいは合戦にほろび給いしがごとし。その時、日本国

ももやそがみ

す

たま

ほうでんみなや

う

しゃかぶつ

てき

の百八十神の栖み給いし宝殿皆焼け失せぬ。釈迦仏に敵す

もの

しゆご

たま

たいか

る者を守護し給いし大科なり。

おんじようじ

えいざん いぜん

てら

ちしようだいし

しんごん

また、園城寺は、叡山已前の寺なれども、智証大師の真言

つた

いま

ちやうり

号

えいざん

まつじ

うたが

を伝えて今に長吏とごうす。叡山の末寺たること疑いなし。

さんもん

とくぶん

だいじよう

かいだん

うば

と

おんじようじ

しかるに、山門の得分たる大乘の戒壇を奪い取つて園城寺

た

えいざん

したが

うんぬん

たと

しやうしん

だいおう

てき

に立てて、叡山に随わじと云々。譬えば、小臣が大王に敵

こ

おや

ふこう

あくぎやく

てら

しんら

し、子が親に不孝なるがごとし。かかる悪逆の寺を新羅

だいみようじん

濫

しゆご

たびたびさんもん

ほうでん

大明神みだれがわしく守護するゆえに、度々山門に宝殿を

や

焼かる。これがごとし。

いま

はちまんだいぼさつ

ほけきよう

だいおんてき

しゆご

てんか

や

今、八幡大菩薩は、法華經の大怨敵を守護して天火に焼か

たま

れい

しん

しこう

せんぞ

じようおう

もう

おう

れ給いぬるか。例せば、秦の始皇の先祖・襄王と申せし王、

かみ

しこうとう

しゆご

たま

しん

しこうだいまん

神となりて始皇等を守護し給いしほどに、秦の始皇大慢を

さんこうごてい

ふんてん

焼

さんせい

こうきやうとう

うしな

なして、三皇五帝の墳典をやき、三聖の孝経等を失いし

はいこう

もう

ひと

つるぎ

だいじゃ

き

ころ

しんこう

かば、沛公と申す人、劍をもつて大蛇を切り死しぬ。秦皇

うじがみ

のち

しん よ

亡

そうら

の氏神これなり。その後、秦の代ほどなくほろび候いぬ。

あ きこく

嚴

しまだいみようじん

へいけ

これもまたかくのごとし。安芸国いつく島大明神は平家の

うじがみ

へいけ

傲

とが

い せだいじんぐう

はちまんとう

かみ

氏神なり。平家をおごらせし失に、伊勢大神宮・八幡等に神

打

う

うしな

のちへいけ

滅

そうら

うちに打ち失われて、その後平家ほどなくほろび候いぬ。

これまたかくのごとし。

ほけきよう

だいし

い

ほとけめつど

のち

よ

ぎ

法華経の第四に云わく「仏滅度して後に、能くその義を

げ

もろもろ

てん

にん

せけん

まなこ

とううんぬん

にちれん

解せば、これ諸の天・人の世間の眼なり」等云々。日蓮

ほけきよう かんじん だいもく にほんこく ぐつう そうろう しよてんせけん

が法華經の肝心たる題目を日本国に弘通し候は、諸天世間

まなこ まなこ いたつ にくげん てんげん

の眼にあらずや。眼には五つあり。いわゆる、肉眼・天眼・

えげん ほうげん ぶつげん ごげん ほけきよう しゆつしよう

慧眼・法眼・仏眼なり。この五眼は法華經より出生せさせ

たも ゆえ ふげんぎよう い ほうどうきよう しょぶつ

給う。故に、普賢經に云わく「この方等經は、これ諸仏の

まなこ しょぶつ よ ごげん ぐ え

眼なり。諸仏はこれに因つて五眼を具することを得たまえ

とううんぬん ほうどうきよう もう ほけきよう もう

り」等云々。「この方等經」と申すは、法華經を申すなり。

きよう い にん てん ふくでん おうぐ なか さい

またこの經に云わく「人・天の福田、応供の中の最なり」

とううんぬん きようもん みようほうれんげきよう にん てん

等云々。これらの經文のごとくば、妙法蓮華經は、人・天

まなこ にじよう ぼさつ まなこ しょぶつ おんまなこ ほけきよう

の眼、二乗・菩薩の眼、諸仏の御眼なり。しかるに、法華經

ぎようじゃ あだ ひと にな てん まなこ 袂 もの ひと
の行者を怨む人は、人・天の眼をくじる者なり。その人を
ばつ しゅごしん いっさい ひと てん まなこ もの けっこう
罰せざる守護神は、一切の人・天の眼をくじる者を結構し
たも かみ
給う神なり。

こうぼう じかく ちしようとう まさ しよ つく
しかるに、弘法・慈覚・智証等は正しく書を作るなり。

ほけきよう むみよう へんいき みよう ぶんい のち のぞ
法華経を「無明の辺域にして明の分位にあらず。後に望め

けろん な りきしや およ は 取 足
ば戲論と作る」「力者に及ばず。履きものとりにとらず」と

書 付 しひやくよねん にほんこく かみいちにん しもばんみん
かきつけて、四百余年、日本国の上一人より下万民にいた

ほけきよう 悔 いっさいしゅじよう まなこ もの
るまで、法華経をあなずらせ、一切衆生の眼をくじる者を

しゅご たも はちまんだいぼさつ けっこう い
守護し給うは、あに八幡大菩薩の結構にあらずや。去ぬる

こうちよう

い

ぶんえいはちねんくがつ

じゅうににち

にちれんいちぶん

弘長と、また去ぬる文永八年九月の十二日に、日蓮一分の

とが

なんみようほうれんげきよう

もう

たいか

こくしゆ

計

失なくして、南無妙法蓮華経と申す大科に、国主のはから

はちまんだいぼさつ

おんまえ

引

張

いつこく

ほうぼう

いとして八幡大菩薩の御前にひきはらせて、一国の謗法の

もの

笑

たま

はちまんだいぼさつ

たいか

者どもにわらわせ給いしは、あに八幡大菩薩の大科にあら

戒

思

同 士 討

ずや。そのいましめとおぼしきは、ただどしうちばかりな

にほんこく

けんおう

うえ

だいいちだいに

おんかみ

はちまん

り。日本国の賢王たりし上、第一第二の御神なれば、八幡に

すぐ

かみ

へんぱ

あ

勝れたる神はよもおわせじ、また偏頗はよも有らじとは

思

いつさいきよう

ほけきよう

掟

おもえども、一切経ならびに法華経のおきてのごときんば、

かみ

たいか

かみ

この神は大科の神なり。

にほんろくじゅうろつかこく

ふた

しま

いちまんいつせんさんじゅうしち

てらでら

ほとけ

日本六十六箇国・二つの島、一万一千三十七の寺々の仏

みな

えぞう

もくぞう

しんごん いぜん

は、皆、あるいは画像、あるいは木像、あるいは真言已前の

てら

いご

てら

ほとけ

みな

寺もあり、あるいは已後の寺もあり。これらの仏は皆、

ほけきよう

しゅつしよう

ほけきよう

まなこ

法華経より出生せり。法華経をもつて眼とすべし。いわ

ほうどうきよう

しよぶつ

まなこ

とううんぬん

みようらく

ゆる「この方等経は、これ諸仏の眼なり」等云々。妙楽

い

きよう

じようじゅうぶつしよう

のど

云わく「しかもこの経は常住仏性をもつて咽喉となし、

いちじようみようぎよう

げんもく

さいせいはいしめ

しんぷ

一乗妙行をもつて眼目となし、再生敗種をもつて心腑と

けんぽんおんじゆ

いのち

とううんぬん

なし、顕本遠寿をもつてその命となす」等云々。しかるを、

にほんこく

なら

しんごんし

限

しよしゅういちどう

ぶつげん

いん

日本国の習い、真言師にもかぎらず諸宗一同に仏眼の印を

もつて開眼し、大日の真言をもつて五智を具足すと云々。
かいげん だいにち しんごん ごち ぐそく うんぬん

これらは、法華經にして仏になれる衆生を真言の権經に
ほけきよう ほとけ 成 しゆじよう しんごん ごんきよう

て供養すれば、還つて、仏を死し、眼をくじり、寿命を
くよう かえ ほとけ ころ まなこ 抉 じゆみよう

断ち、喉をさきなんどする人々なり。提婆が教主釈尊の身
た のど 裂 ひとびと だいば きようしゆしやくそん み

より血を出だし、阿闍世王の彼の人を師として現罰に値い
ち い あじやせおう か ひと し げんばち あ

しに、いかでかおとり候べき。八幡大菩薩は応神天皇、
しようこく おう 劣 そうろう はちまんだいぼさつ おうじんてんのう

小国の王なり。阿闍世王は摩竭大国の大主なり。天と人と、
おう たみ しようれつ あじやせおう まかつだいこく だいしゆ てん にん

王と民との勝劣なり。しかれども、阿闍世王なお釈迦仏に
おう たみ しようれつ あじやせおう しやかぶつ

敵をなして悪瘡身に付き給いぬ。八幡大菩薩いかでかその
かたき あくそうみ つ たま はちまんだいぼさつ

とが のが
科を脱るべき。

い ぶんえいじゆういちねん だいもうこ 寄 にほんこく つわもの
去ぬる文永十一年に、大蒙古よりよせて日本国の兵を

おお 滅 はちまん きゆうでん 焼
多くほろぼすのみならず、八幡の宮殿すでにやかれぬ。そ

とき なん か くに つわもの ぼつ たま し
の時、何ぞ彼の国の兵を罰し給わざるや。まさを知るべ

か くに だいおう くに かみ すぐ 明
し、彼の国の大王はこの国の神に勝れたることあきらけし。

じようおう もう かみ かんど だいいち かみ はいこう りけん
襄王と申せし神は、漢土の第一の神なれども、沛公が利劍

き たま 思
に切られ給いぬ。これをもつておもうべし。

どうきようほつし しやうとくてんのう こころ 寄 な こくおう な
道鏡法師、称徳天皇の心よせと成つて国王と成らんと

とき きよまる はちまんだいぼさつ きしやう とき はちまん ごせんたく い
せし時、清丸、八幡大菩薩に祈請せし時、八幡の御託宣に云

わく「夫れ、神に大小・好し悪し有り乃至彼は衆く、我は

寡なし。邪は強く、正は弱し。乃ち、当に仏力の加護を仰

いで、ために皇緒を紹隆すべし」等云々。当に知るべし、

八幡大菩薩は正法を力として王法をも守護し給いけるな

り。叡山・東寺等の真言の邪法をもつて権大夫殿を調伏せ

しほどに、権大夫殿はかたせ給い、隠岐法皇まけさせ給い

ぬ。「還つて本人に著きなん」これなり。

今また、日本国一万一千三十七の寺、ならびに三千

いっぴやくさんじゆにしゃ かみ こっ かあんのん 崇 そうつろう

一百三十二社の神は、国家安穩のためにあがめられて候。

てらでら

べつとうとう

やしろやしろ

かんぬしとう

しかるに、その寺々の別当等、その社々の神主等は、

皆々 崇

ほんぞん

かみ

みこころ

そうい

みなみなあがむるところの本尊と神との御心に相違せり。

かれがれ

ほとけ

かみ

みいたい

こころどうしん

彼々の仏と神とは、その身異体なれども、その心同心に

ほけきよう

しゅごしん

べつとう

しやしゅとう

しんごんし

法華經の守護神なり。

別当と社主等は、あるいは真言師、

ねんぶつしや

ぜんそう

りつそう

みないちどう

あるいは念仏者、あるいは禅僧、あるいは律僧なり。皆一同

はちまんとう

おん

敵

ほうぼうふこう

もの

しゅご

たま

に八幡等の御かたきなり。

謗法不孝の者を守護し給いて、

しょうほう もの

るざい

しざいとう

おこな

正法の者あるいは流罪、あるいは死罪等に行わするゆ

てん

責

こうむ

たま

えに、天のせめを被り給いぬるなり。

わ

でしとう

うち

ほうぼう

よけいあ

もの

おも

我が弟子等の内、謗法の余慶有る者の思つていわく「こ

ごぼう はちまん

敵

うんぬん

どうりあ

の御房は八幡をかたきとす」と云々。これ、いまだ、道理有

ほう じようじゆ

ほんぞん

責

ぞんち

って法の成就せぬには本尊をせむるということを知せざ

もの おも

ふほうぞうきよう

もう

きよう

だいかしやうそんじや

いんねん

る者の思いなり。付法蔵経と申す経に大迦葉尊者の因縁を

と い

とき

まかつこく

ばらもんあ

にくりだ

な

説いて云わく「時に摩竭国に婆羅門有り、尼俱律陀と名づ

か こ よ

ひさ

しやうぎやう

しゆ

おお

ざいほうゆた

く。過去の世において久しく勝業を修す○多く財宝饒か

こ ふ む り しよう

まかつおう

ひ

せんばいすぐ

にして巨富無量なり○摩竭王に比するに千倍勝れたりとな

ざいほうゆた

しそくあ

みずか

おも

す○財宝饒かなりといえども、子息有ることなし。自ら念

ろうきゆう

し

ときまる

いた

くぞう

しよもつ

いふ

わく『老朽して死の時將に至らんとす。庫蔵の諸物も委付

な

いえ

そば

じゆりんじんあ

か

ば

するところ無し』。その舎の側において樹林神有り。彼の婆

らもん

こもと

ゆえ

すなわ

い

きしよう

ねんさい

羅門、子を求めんがための故に、即ち往つて祈請す。年歳

きようりやく

しるしな

にくりだおお

しんぶん

を逕歴すれども、徴無し。ただちに尼俱律陀大いに瞋忿

しよう

じゆしん

かた

い

われなんじ

つか

このかた

を生じて樹神に語つて曰わく『我汝に事えてより来、

ねんさい

ひと

ふくおう

た

すでに年歳を逕れども、すべてために一つの福応を垂るる

み

いま

なのかししん

なんじ

つか

しるしな

をも見ず。今なお七日至心に汝に事えん。もしまた験無く

かなら

あいしようせん

あき

じゆしん

お

んば、必ず相焼剪せん』。明らかに樹神聞き已わつて

甚

しゆうふ

いだ

してんのう

む

はなはだ愁怖を懷き、四天王に向かつて、つぶさにこのこ

の

しおうい

たいしやく

もう

たいしやく

とを陳ぶ。ここにおいて、四王往つて帝釈に白す。帝釈、

えんぶだい

うち

かんさつ

ふくとく

ひと

か

こ

閻浮提の内を觀察するに、福德の人にして彼の子となるに

た な すなわ ぼんのう もう ひろ かみ の
堪うる無し。即ち梵王に詣で、広く上のことを宣ぶ。その

とき ぼんのう てんげん かん ぼんてん みようじゅう のぞ

時に梵王、天眼をもつて観ずるに、梵天にして命終に臨当

あ み っ い なんじ たましい

む有るを見る。しかして、これに告げて曰わく『汝もし神

くだ まさ か えんぶだいかい ばらもん いえ しょう

を降さば、よろしく当に彼の閻浮提界の婆羅門の家に生ず

ぼんてんこた い ばらもん ほう あくじやけんおお われいま

べし』。梵天对えて曰わく『婆羅門の法、悪邪見多し。我今

こ あた ぼんのう い か ば

その子となること能わざるなり』。梵王また言わく『彼の婆

らもん だいいとくあ えんぶだい ひとい しょう た

羅門は大威徳有り。閻浮提の人往つて生ずるに堪うるなし。

なんじかなら しょう われあいまも つい なんじ じゃけん

汝必ずかしこに生ぜば、吾相護つて終に汝をして邪見

い ぼんてん い だく つつし しょうぎよう う

に入らしめざるなり』。梵天曰わく『諾、敬んで聖教を承

たいしやくすなわ

じゆしん

む

けん』。ここにおいて、帝釈即ち樹神に向かつて、かくの

と

じゆしん

かんき

いえ

いた

ごときことを説く。樹神、歓喜して、ついでその家に詣つ

ばらもん

かた

なんじ

いま

うら

われ

お

て婆羅門に語らく『汝、今また恨みを我に起こすことなか

さ

のちなのか

まさ

けい

がん

み

なのか

いた

れ。却つて後七日、当に卿が願を満たすべし』。七日に至り

お

めはら

あ

おぼ

とつき

そくまん

いちなんじ

已わつて、婦身むこと有るを覚え、十月を足満して一男児を

う

ないしいま

かしやうとう

うんぬん

生めり乃至今の迦葉等これなり」云々。

にくり

だおお

しんふん

しやう

とううんぬん

つね

「ただちに尼俱律陀大いに瞋忿を生ず」等云々。常のご

うじがみ

む

だいしんに

しやう

もの

こんじやう

ときんば、氏神に向かつて大瞋恚を生ぜん者は、今生に

み

滅

ごしやう

あくどう

お

は身をほろぼし、後生には悪道に墮つべし。しかりといえ

ども、尼俱律陀長者、氏神に向かつて大悪口・大瞋恚を生にくり だちようじゃ うじがみ む だいあつく だいしんに しょう

じて大願を成就し、賢子をもうけ給いぬ。当に知るべし、だいがん じようじゅ けんし たま まさ し

瞋恚は善惡に通ずるものなり。しんに ぜんあく つう

今、日蓮は、去ぬる建長五年癸丑四月二十八日より今いま にちれん い けんちようごねんみずのとうししがつにじゅうはちにち いま

こうあんさんねんたいさいかのえたつじゅうにがつ

にじゅうはちねん あいだ

弘安三年太歳庚辰十二月にいたるまで、二十八年が間、ま

た他事なし。ただ妙法蓮華經の七字五字を日本国の一切たじ みようほうれんげきよう しちじごじ にほんこく いっさい

衆生の口に入れんとはげむばかりなり。これ即ち、母のしゅじよう くち い 励 すなわ はは

赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲なり。これまた時の当たあかご くち ちち い じひ とき あ

らざるにあらず。すでに仏記の五の五百歳に当たれり。ぶつき ご ごひやくさい あ

てんだい でんぎよう おんとき とき きた いちぶん

天台・伝教の御時は、時いまだ来らざりしかども、一分の

き ゆえ しょうぶん る ふ いま とき

機ある故に少分流布せり。いかにいわんや、今はすでに時

き すいか ぐつう

いたりぬ。たとい機なくして水火をなすとも、いかでか弘通

せざらん。

ふきよう だいなん あ る ふ うたが

ただ不輕のごとく大難には値うとも、流布せんこと疑い

しんごん ぜん ねんぶつしやとう ざんそう む ち

なかるべきに、真言・禅・念仏者等の讒奏によつて無智の

こくしゆるなん たいじ うじがみ はちまんだいぼさつ かれ

国主留難をなす。これを対治すべき氏神・八幡大菩薩、彼ら

たいか じ にちれん うじ かみ かんぎよう どうり

の大科を治せざるゆえに、日蓮、氏の神を諫曉するは、道理

そむ に くり だちようじや じゆしん 諫 こと

に背くべしや。尼俱律陀長者が樹神をいさむるに異ならず。

そしつじきよう

い

ほんぞん

じばつ

きみ

じ

蘇悉地經に云わく「本尊を治罰すること、鬼魅を治するが

とううんぬん

もん

こころ

きようもん

しよがん

じよう

ごとし」等云々。文の心は、經文のごとく所願を成ぜん

すうねん

あいだほう

しゆぎよう

じようじゆ

ほんぞん

がために数年が間法を修行するに、成就せざれば、本尊

縛

う

説

をあるいはしばり、あるいは打ちなんどせよととかれて

そうろう

そうおうかしよう

ふどうみようおう

縛

きようもん

み

候。相応和尚の不動明王をしばりけるは、この經文を見

たりけるか。

たじ

似

にほんこく

いっさい

ぜんにん

これは他事にはにるべからず。日本国の一切の善人は、

かい

たも

ふせ

ぎよう

ふぼとう

あるいは戒を持ち、あるいは布施を行じ、あるいは父母等

こうよう

じとう

こんりゆう

じようぶつとくどう

の孝養のために寺塔を建立し、あるいは成仏得道のため

さいし

養

たから

とど

しよそう

くよう

そうろう

に妻子をやしなうべき財を止めて諸僧に供養をなし候

しよそうほうぼう

もの

むほん

もの

し

宿

に、諸僧謗法の者たるゆえに、謀反の者を知らずしてやどし

ふこう

もの

契

こんじよう

たるがごとく、不孝の者にちぎりなせるがごとく、今生に

さいなん

まね

ごしよう

あくどう

お

そうろう

たす

は災難を招き、後生も悪道に堕ち候べきを扶けんとする

み

にほんこく

しゅご

ぜんじんとう

かれ

与

身なり。しかるを、日本国の守護の善神等、彼らにくみし

しようほう

かたき

責

きようもん

て正法の敵となるゆえに、これをせむるは経文のごとし。

どうり

まか

道理に任せたり。

わ

でしとう

ぐあん

思

わ

し

ほけきよう

ぐつう

我が弟子等が愚案におもわく「我が師は法華経を弘通し

たも

広

うえ

だいなん

きた

しんごん

くに

給うとてひろまらざる上、大難の来れるは、『真言は国を

亡

ねんぶつ

むけんじごく

ぜん

てんま

しよい

りつそう

こくぞく

ほろぼす、念仏は無間地獄、禅は天魔の所為、律僧は国賊』

宣

れい

どうりあ

もんちゆう

あっこう

雑

とのたもうゆえなり。例せば、道理有る問注に悪口のまじ

われるがごとし」と云々。

にちれん

わ

でし

はんきつ

い

なんじ

日蓮、我が弟子に反詰して云わく、汝もししからば、我

と

こた

いっさい

しんごんし

いっさい

ねんぶつしや

いっさい

ぜんしゆう

が問いを答えよ。一切の真言師、一切の念仏者、一切の禅宗

とう

む

なんみようほうれんげきよう

とな

たま

かんじん

等に向かつて、「南無妙法蓮華経と唱え給え」と勧進せば、

かれ

い

わ

こうぼうだいし

ほけきよう

しゃかぶつ

けろん

彼ら云わく「我が弘法大師は、法華経と釈迦仏とをば、戯論、

むみよう

へんいき

りきしや

履

もの取

およ

書

たま

そうろう

無明の辺域、力者・はき物とりに及ばずとかかせ給いて候。

もの

ゆう

合

ほけきよう

どくじゆ

くち

わ

物の用にあわぬ法華経を読誦せんよりも、その口に我が

しようじゅ　いっぺん　み　いっさい　ざいけ　ものい　ぜんどうおしょう

小呪を一反も見つべし」。一切の在家の者云わく「善導和尚

ほけきょう　せんちゅうむいち　ほうねんしょうにん　しゃへいかくほう　どうしやくぜんじ

は法華経をば千中無一、法然上人は捨閉閣抛、道綽禅師は

み　う　いちにん　とくしや　さだ　たま　なんじ　勸

未有一人得者と定めさせ給えり。汝がすすむる

なんみようほうれんげきょう　わ　ねんぶつ　さわ　われ　あく

南無妙法蓮華経は、我が念仏の障りなり。我らたとい悪は

造　とな　いっさい　ぜんしゅうい　わ　しゅう

つくるとも、よも唱えじ」。一切の禅宗云わく「我が宗は、

きようげべつでん　もう　いっさいきょう　ほか　つた　さいじょう　ほうもん

教外別伝と申して、一切経の外に伝えたる最上の法門な

いっさいきょう　ゆび　ぜん　つき　てんだいとう　ぐにん

り。一切経は指のごとし。禅は月のごとし。天台等の愚人

ゆび　守　つき　うしな　ほけきょう　ゆび　ぜん　つき

は指をまぼって月を亡いたり。法華経は指なり。禅は月な

つき　み　のち　ゆび　なん　詮　あ　もう

り。月を見て後は指は何のせんか有るべき」なんと申す。

もう とき

なんみようほうれんげきよう

かくのごとく申さん時は、いかにとしてか、南無妙法蓮華經

ろうやく

かれ

くち

い

の良薬をば彼らが口には入るべき。

ほとけ

あこんきよう

と

たま

のち

か

ぎようじゃ

仏は、しばらく阿含經を説き給いて後、彼の行者を

ほけきよう

い

謀

たま

いっさい

しょうもんとう

法華經へ入れんとたばかり給いしに、一切の声聞等、

あこんきよう

じやく

ほけきよう

い

阿含經に著して法華經へ入らざりしをば、いかようにか

謀

たま

ほとけと

のたま

たばからせ給いし。これをば仏説いて云わく「たとい

ごぎやくざい

つく

ごぎやく

もの

くよう

つみ

ほとけ

たね

五逆罪は造るとも、五逆の者をば供養すとも、罪は仏の種

かれ

ぜんこん

ぶつしゆ

と

たま

とはなるとも、彼らが善根は仏種とならじ」とこそ説かせ給

しょうじよう

だいじよう

変

おな

ぶつせつ

だい

いしか。小乗・大乘はかわれども同じく仏説なり。大が

しよう は しょう だい ほけきよう い

小を破して小を大となすと、大を破して法華經に入るる

だいしよう こと ほけきよう い おも こころざし

と、大小は異なれども、法華經へ入れんと思う 志 はこ

ひと

れ一つなり。

むりようぎきよう だい は い しんじつ あらわ

されば、無量義經に大を破して云わく「いまだ真実を顕

ほけきよう い じ ふか とううんぬん ほとけ

さず」。法華經に云わく「この事は不可となす」等云々。仏

われ のたま われ よ い けごん はんにやとう と ほけきよう

自と云わく「我世に出でて、華嚴・般若等を説いて法華經

説 にゆうねはん あいし たから 惜 びようじや ろうやく

をとかずして入涅槃せば、愛子に財をおしみ、病者に良薬

与 ほとけみずか き い

をあたえずして死したるがごとし」。仏自ら記して云わく

じごく お うんぬん ふか もう じごく な

「地獄に墮つべし」と云々。「不可」と申すは地獄の名なり。

況 ほけきよう のち にぜん きよう じゃく ほけきよう 移

いおうや、法華經の後、爾前の經に著して法華經へうつら

もの だいおう たみ したが おや こ まみ

ざる者は、大王に民の従わざるがごとし。親に子の見えざ

ほけきよう は にぜん きようぎよう

るがごとし。たとい法華經を破せざれども爾前の經々を

讃 ほけきよう 謗 あ みようらくい

ほむるは、法華經をそしるに当たれり。妙樂云わく「もし

むかし しようたん いま そし もん

昔を称歎せば、あに今を毀るにあらずや」文。また云わ

ほっしん ほつ いま そし へん えん えら せいきよう

く「発心せんと欲すといえども、偏・円を簡ばず、誓境を

さと みらい ほう き なん よ ぼう まぬか

解らずんば、未来に法を聞くとともに、何ぞ能く謗を免れん」

とううんぬん

等云々。

しんごん ぜんむい こんごうち ふくう こうぼう じかく ちしようとう

真言の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覚・智証等は、

ほけきよう

だいにちきよう

あいたい

しょうれつ

そん

たとい法華經を大日經に相對して勝劣を論ぜずして

だいにちきよう

ぐつう

めつご

う

さんぞう

にんし

大日經を弘通すとも、滅後に生まれたる三藏・人師なれば、

ほうぼう

まぬか

そうら

ぜんむいとう

さん

謗法はよも免れ候わじ。いかにいわんや、善無畏等の三

さんぞう

ほけきよう

りやくせつ

だいにちきよう

こうせつ

どう

三藏は、法華經は略説、大日經は広説と同じて、しかも

ほけきよう

ぎようじや

だいにちきよう

賺

い

こうぼうとう

さんだいし

法華經の行者を大日經へすかし入れ、弘法等の三大師は

ほけきよう

みな

けろん

書

そうろう

法華經の名をかきあげて「戲論」なんどかかれて候を、

たいか

あき

しひやくよねん

いつさいしゆじようみなほうぼう

もの

大科を明らめずして、この四百余年、一切衆生皆謗法の者

となりぬ。

れい

だいしようごんぶつ

まつ

しびく

ろつびやくまんおくな

ゆた

ひと

例せば、大莊嚴仏の末の四比丘が六百万億那由他の人

みなむけんじごく

お

ししおんのうぶつ

まつ

しょういびく

を皆無間地獄に墮とせると、師子音王仏の末の勝意比丘が

むりようむへん

じかい

びく

びくに

優婆塞

優婆夷

みなあび

無量無辺の持戒の比丘・比丘尼・うばそく・うばいを皆阿鼻

だいじよう

みちび

いま

さんだいし

きようけ

したが

にほんぎ

大城に導きしと、今の三大師の教化に随つて、日本記に

ぎようきかぞ

い

なんによしじゆうごくおくはちまんくせんろつびやくごじゆうくにん

行基数えて云わく、男女四十五億八万九千六百五十九人

うんぬん

い

にほんこくしじゆうごくおくまんしせんはつびやくにじゆうはち

云々、あるいは云わく日本国四十九億九万四千八百二十八

にん

いっさいしじゆう

しじゆうくおくとう

しじゆうくおくとう

ひとびと

人の一切衆生、また四十九億等、また四十九億等の人人々、

しひやくよねん

し

むけんじごく

お

のち

たほう

四百余年に死して無間地獄に墮ちぬれば、その後また他方

せかい

う

し

むけんじごく

お

世界よりは生まれて、また死して無間地獄に墮ちぬ。かく

お

もの

だいちみじん

おお

みな

さんだいし

のごとく、墮つる者は大地微塵よりも多し。これ皆、三大師

の科ぞかし。日蓮とが にちれん おお み 偽 愚これらを大いに見ながら、いつわりおろか

にしてこれを申さずば、ともに墮地獄もう だじごく もの いちぶんの者となつて、一分の

科なき身が十方の大阿鼻地獄とが み じつぼう だいあびじごく へ 回を経めぐるべし。いかでか

身命しんみよう 捨 呼をすててよばわらざるべき。

涅槃經ねはんぎよう いに云わく「一切衆生の異の苦いつさいしゆじよう い く うを受くるは、ことごとく

とくこれ如来一人の苦によらいいちにん く とううんぬん にちれん いなり」等云々。日蓮いつさいしゆじよう云わく、一切衆生

の同一苦は、ことごとくこれ日蓮一人の苦どういつく にちれんいちにん く もうなりと申すべし。

平城天皇の御宇に、八幡の御託宣へいぜいてんのう ぎよう はちまん ごたくせん い われ にほんに云わく「我はこれ日本

の鎮守・八幡大菩薩なり。百皇ちんじゆ はちまんだいぼさつ ひやくおう しゆご せいがん とううんぬんを守護せん誓願あり」等云々。

いまい にんのうはちじゅういち にだいおきのほうおう さん し ご しょうおう

今云わく、人王八十一・二代隱岐法皇・三・四・五の諸皇す

やぶ お のこ にじゅうよだい います お

でに破られ畢わんぬ。残りの二十余代、今捨てられ畢わん

ぬ。すでにこの願破るるがごとし。

にちれん りようけん い ひやくおう しゅご しょうじき

日蓮、料簡して云わく、百王を守護せんというは、正直

おうひやくにん しゅご ちか はちまん ごせいがん い

の王百人を守護せんと誓いたもうか。八幡の御誓願に云わ

しょうじき ひと いただき すみか てんごく ひと こころ

く「正直の人の頂をもつて栖となし、諂曲の人の心を

う とううんぬん そ つき せいすい かげ 宿 じよくすい

もつて享けず」等云々。夫れ、月は清水に影をやどす、濁水

住 おう もう ふもうご ひと うだいしょうけ

にすむことなし。王と申すは不妄語の人。右大将家・

ごんのだいぶどの ふもうご ひと しょうじき いただき はちまんだいぼさつ すみか

権大夫殿は不妄語の人、正直の頂、八幡大菩薩の栖、

ひやくおう　うち

百皇の内なり。

しょうじき　ふた

正直に二つあり。一には世間の正直。王と申すは天・

いち　せけん　しょうじき　おう　もう　てん

人・地の三つを串くを王と名づく。天・人・地の三つは横

なり。たつてんは縦なり。王と申すは、黄帝、中央の名な

立　点　たて　おう　もう　こうてい　ちゅうおう　な

り。天の主・人の主・地の主を王と申す。隠岐法皇は、名は

てん　しゅ　じん　しゅ　ち　しゅ　おう　もう　おきのほうおう　な

国王、身は妄語の人、横人なり。権大夫殿は、名は臣下、身

こくおう　みあ　もうご　ひと　おうにん　ごんのだいぶどの　な　しんか　み

は大王、不妄語の人、八幡大菩薩の願い給う頂なり。

だいおう　ふもうご　ひと　はちまんだいぼさつ　ねが　たも　いただき

二には出世の正直と申すは、爾前・七宗等の経論釈は

に　しゅつせ　しょうじき　もう　にぜん　しちしゅうとう　きょうろんしやく

妄語、法華経・天台宗は正直の経釈なり。本地は不妄語

もうご　ほけきょう　てんだいしゅう　しょうじき　きょうしやく　ほんじ　ふもうご

妄語、法華経・天台宗は正直の経釈なり。本地は不妄語

きよう　しゃかぶつ　しゃく　ふもうご　はちまんだいぼさつ　はちよう

の経の釈迦仏、迹には不妄語の八幡大菩薩なり。八葉は

はちまん　なかだい　きようしゅしゃくそん　しがつようかとらのひ　う

八幡、中台は教主釈尊なり。四月八日寅日に生まれ、

はちじゅうねん　へ　にがつじゅうごにちさるのひ　かく　たも　きようしゅ

八十年を経て、二月十五日申日に隠れさせ給う。あに教主

にほんこく　う　たも　おおすみ　しょうはちまんぐう　いしぶみ

の日本国に生まれ給うにあらずや。大隅の正八幡宮の石文

い　むかしりようじゅせん　あ　みようほけきよう　と　いましやうぐう

に云わく「昔靈鷲山に在って妙法華経を説き、今正宮の

なか　あ　だいぼさつ　じげん　とううんぬん　ほけきよう　い　いま

中に在って大菩薩と示現す」等云々。法華経に云わく「今こ

さんがい　とううんぬん　つね　りようじゅせん　あ　とううんぬん　とお

の三界」等云々。また「常に靈鷲山に在り」等云々。遠く

さんぜんだいせんせかい　いつさいしゅじよう　しゃかによらい　こ　ちか

は三千大千世界の一切衆生は釈迦如来の子なり。近くは

にほんこくしじゅうくおくくまんしせんはつびやくにじゅうはちにん　はちまんだいぼさつ　こ

日本国四十九億九万四千八百二十八人は八幡大菩薩の子

いま にほんこく いっさいしゅじょう はちまん たの たてまつ

なり。今、日本国の一切衆生は、八幡を待み奉るように

しゃかぶつ 捨 たてまつ 敬 たい

もてなし釈迦仏をすて奉るは、影をうやまつて体を

侮 こ む おや 罵 ほんじ しゃかによらい

あなずる、子に向かつて親をのるがごとし。本地は釈迦如来

がつしこく い しょうじき しゃほうべん ほけきよう と たま

にして、月氏国に出でては正直捨方便の法華経を説き給い、

すいじやく にほんこく う しょうじき いただき 栖 たも

垂迹は日本国に生まれては正直の頂にすみ給う。

もろもろ ごんげ ひとびと ほんじ ほけきよう いちじつそう

諸の権化の人々、本地は法華経の一実相なれども、

すいじやく もん むりよう はくら そんじや さんぜ

垂迹の門は無量なり。いわゆる、髮俱羅尊者は三世に

ふせつしようかい しめ おうくつまら しょうじよう せつしよう しめ しゃりほつ

不殺生戒を示し、鶯崛摩羅は生々に殺生を示す。舍利弗

げどう もんもんふどう もとぼんぷ

は外道となり、かくのごとく門々不同なることは、本凡夫に

とき しよほつとくどう

はじ

じようぶつ

のちけたもん

い

たも

てありし時の初発得道の始めを、

成仏の後化他門に出で給

とき

わ

とくどう

もん

しめ

みようらくだいしい

ほん

う時、我が得道の門を示すなり。

妙楽大師云わく「もし本

したが

と

むかしせつとう

あく

なか

よ

に従つて説かば、またこれ昔殺等の悪の中において能く

しゆつり

ゆえ

ゆえ

しやく

なか

せつ

出離するが故なり。この故に、迹の中にまた殺をもつて

りた

ほうもん

とううんぬん

利他の法門となす」等云々。

いま

はちまんだいぼさつ

ほんじ

がっし

ふもうご

ほけきよう

しやく

今、八幡大菩薩は、本地は月氏の不妄語の法華経を、迹

にほんこく

しやうじき

にじ

けんじん

いただき

宿

に日本国にして正直の二字となして賢人の頂にやどら

うんぬん

だいぼさつ

ほうでん

焼

てん

んと云々。もししからば、この大菩薩は宝殿をやきて天に

昇

たも

ほけきよう

ぎやうじやにほんこく

あ

のぼり給うとも、法華経の行者日本国に有るならば、その

ところ す たも

所に栖み給うべし。

ほけきょう だいご い

しよてん ちゅうや つね ほう

ゆえ

法華經の第五に云わく「諸天は昼夜に、常に法のための故

えご もん きょうもん

に、しかもこれを衛護す」文。經文のごとくば、

なんみようほうれんげきょう

もう ひと

だいぼんてん たいしやく にちがつ してんとう

南無妙法蓮華經と申す人をば、大梵天・帝釈・日月・四天等、

ちゅうや しゅご

み

だいろく かん い

昼夜に守護すべしと見えたり。また、第六の卷に云わく「あ

こしん と

たしん と

こしん しめ

るいは己身を説き、あるいは他身を説き、あるいは己身を示

たしん しめ

こじ しめ

し、あるいは他身を示し、あるいは己事を示し、あるいは

たじ しめ

もん

かんのん

さんじゅうさんしん

げん

みようおん

他事を示す」文。観音なお三十三身を現じ、妙音また

さんじゅうしん

げん たも

きょうしゅしやくそんなん

はちまんだいぼさつ

げん

たま

三十四身を現じ給う。教主釈尊何ぞ八幡大菩薩と現じ給

わざらんや。天台云わく「即ちこれ形を十界に垂れて種々

の像を作す」等云々。

てんじくこく

がつしこく

もう

ほとけ

しゆつげん

たも

な

天竺国をば月氏国と申す、仏の出現し給うべき名なり。

ふそうこく

にほんこく

もう

しょうにんい

たま

つきにし

扶桑国をば日本国と申す、あに聖人出で給わざらん。月は西

ひがし

む

がつし

ぶつぽう

ひがし

なが

そう

ひ

より東に向かえり。月氏の仏法の東へ流るべき相なり。日

ひがし

い

にほん

ぶつぽう

がつし

還

ずいそう

つき

は東より出ず。日本の仏法の月氏へかえるべき瑞相なり。月

ひかり 明

ざいせ

はちねん

ひ

こうみよう

つき

は光あきらかならず。在世はただ八年なり。日は光明、月

まさ

い

ごひやくさい

なが

やみ

て

ずいそう

に勝れり。五の五百歳の長き闇を照らすべき瑞相なり。

ほとけ

ほけきようほうぼう

もの

じ

たま

ざいせ

な

仏は法華経謗法の者を治し給わず。在世には無きゆえに。

まっぼう

いちじよう

ごうてきじゆうまん

ふきようぼさつ

りやく

末法には一乗の強敵充滿すべし。

不輕菩薩の利益これな

おのおのわ

でしとう

励

たま

り。各々我が弟子等、はげませ給え、はげませ給え。

こうあんさんねんたいさいかのえたつじゆうにがつ

にち

にちれん

かおう

弘安三年太歳庚辰十二月 日

日蓮 花押